

鴛毛

舟楫聖

(林 襲本)

昭和二十四年二月一日印刷
昭和二十四年二月十日發行

定價 二五〇圓

著 者 舟 橋 聖 一

發行者 東京都文京區音羽町三ノ一九
尾 張 眞 之 介

印刷者 東京都港區芝三田豐岡町八
川 口 芳 太 郎

印刷所 東京都港區芝三田豐岡町八
圖書印刷株式會社

發行所

株式會社

東京都文京區音羽町三ノ一九
大日本雄辯會講談社
振替口座電話(33)代表一八六番
東京三九三〇九段(33)代表一八六番
自由出版部發行

目次

鷺

毛

三

虚空のをんな

一七五

題

簽

川

端

康

成

第
壹
の
卷

余は大いなる過失を犯した。これは、知加の一生にとつても、又、余の一生にとつても、挽回することの全く不可能な致命傷であるが、然し、只今、最期の宣告をうけるまで、余は頑迷にも、余の過失を否認しつゞけてきたのである。知らなかつたのではない。敢て、知るを欲しなかつたのである。

余は、數年前に還厓を迎へた、二人の息子、二人の娘の父親である。長男には妻があり、その間に、六歳の孫娘さへある。しかも、余には、喜壽に近い姉、二つ違ひの兄、そのほか、叔父叔母などの

生存する者が多く、兩親こそ物故したが、市松家一門の繁昌は、こかしこに枝をひろげてゐるので、余は、上からも下からも、又、横からも、目に見えぬ制肘をうけ易く、板ばさみの感をまぬかれ得なかつたのである。

先妻すぎは、余が四十六歳の年に、鬼籍に入つた。わづかに七日ほど患つて、慌しく余が前から消え失せたが、當時、余は、別にこれといふ程の感傷もなく、世間普通の型通りに、死者を葬ることが出来たのである。すぎは、もと、三土氏。家と家との定めた結婚であつたから、余にとつては、隔靴搔痒の感がついて廻つてゐて、物足りぬまゝに、さりとて、他に慰みを求めるといふ勇氣もなく、ごく平凡な夫婦生活を営むうちに、いつとなく二男二女を生んでつ

たといふ始末であつた。

そのやうな、張合ひの少い夫婦でも、すぎの生きてゐるうちは、まだしも、退屈をまぎらした余は、すぎの死後は、文字通りの孤獨無援であつた。余は、わづかに末娘の若子を相手に、會社から歸れば、しきりに、ピアノを彈ずるのが、日日の日課となつた。

すぎの三回忌がすむ頃から、余に對し、後妻を推す者が頗る多かつた。その中、稍々、意の動いたのは、R音樂學校のヴァイオリンの女教師で、數年前夫君に死別し、子は無く、年も二十六歳といふ若ざかりであり、先づ、條件として満點である外、余がピアノを彈ずれば、彼女は、ヴァイオリンを奏し、趣味生活にあつても、好伴侶たるを失はなかつたが、音樂ざらひの上娘の朝子から、お父さん

のピアノだけでもうんざりしてゐるのに、このうへ、ヴァイオリンを鳴らされては、とても、一緒には住めないといふ強硬な反對が出て、忽ち潰滅した。

余としても一家の幸福を思へば、余一人の勝手をふるまふことは許されぬ。それには年ごろの息子や娘の意見を尊重することが最も肝腎といはねばならぬ。余の後妻は、余の先妻にもまして、余の獨占物ではないのであるから、見合ひの如きも、余の相手の人との間に行はれるよりも、むしろ、子供達との間に行はれることが、必須條件であつた。假りに、余のみが氣に入つても、子供達が異議を唱へれば、如何ともなし難いのであつた。然るに、子供の數は四人であるから、三人が可とするも、他の一人が否とすれば、成立しない

わけである。四人が四人、びつたりと氣に入つて、しかも、余にとつても、まんざらでないといふやうな、完全無缺の女性は、こんどは、先方で、そんな、繼つ子の澤山ゐる家なんぞは、まつ平ごめんだといふことになるので、余の後妻問題は、再三、再四、燃えかけでは、くすぶり、いつも龍頭蛇尾に終るのであつた。それでゐて、ずる分、話がもちこまれ、中には相當、熱心な仲人口をきく人もあつたから、不思議である。

そのうちに、長男の方が、一足お先きに、細君を迎へた。娘達の告口によると、長男とその細君とは、一方は大學、一方は女學校時代、通學の道すがら、交際を結んだいはゆる戀愛結婚であるといふ。余には、曾て、戀愛の經驗がなかつたので、息子の戀愛に對しては、

甚だ、物珍しい氣持を否めなかつた。余は、嫉妬せず、むしろ、それを珍重したかの如くであつた。

余は、すぎの死後も、二階の一室に起臥してゐたが、長男の結婚と同時に、二階を新夫婦に明けわたし、余は階下に下り、次男と同居することになつた。そのうちに、次男が結婚すれば、娘らと、同居するほかはなく、更に、娘らが夫々片づけば、余はいづこにこの身を横たふべきか。余は、時折、寂寞の感にうたれることもあつた。

余が舊き日記によれば、知加が余の家に、はじめて來た日は、第二次近衛内閣の成立した朝であつた。余は、當時の大衆と同じに、近衛に對しては、たゞ、漠然と、明るい期待をもち、まさか、數年

後に、この大敗を招くやうな、恐ろしい運命の一段階が、迫りつゝあらうとは、思ひもよらぬことだつたのである。今にして思へば、外相は松岡であり、陸相は、滿洲から飛來した東條であり、文部の橋田、無任所の星野、などとかぞへれば、すでに、この内閣の方向が、日本をどこへ陥れようとしてゐるかは明白だつたが、それを事前を知る由もない。余は、相撲の新番附を見る程度の、關心と興味で、この新内閣のラインアップに目をそゝいでゐると、庭木戸があき、青い夏草の葉越しに、知加の歩いてくる足音が聞えた。

余の目が、新聞から、徐ろに庭先に轉じたとき、余はドキリとした。菖蒲の中形の四つ織に、青い帶をしめてゐる知加の姿が、夏の日の、ガラガラする強い光線を浴びてゐて、一際、あざやかな印象

を刻んだからであつた。

余は、思ひ出せなかつた。似た面影すらないのであつた。余は、縁先へ向いて、誰れときいた。

知加は、頬を染め、目をうるませて、ボウとしたまゝ、暫くは夏草の中に、立つたまゝでゐた。それから、叮嚀に、頭をさげた。白いうなじが、襟元ふかく垂れるまで、頭をさげて、叔父さま、ごきげんよろしうございます、といった。誰だらう、まだ、わからない、と、余は、おのれのまなこをいぶかつた。知加は、余との間に、一株の沈丁花と、一むらのあぢさるをはさんで、それ以上傍へ寄らうとはしなかつた。そして、表玄關の鍵が下りてゐたので、庭木戸を押しあけて推參に及んだ無作法を、細い聲で言譯した。余はこの時

の初印象を、永久に忘れ難いのである。余は、風の如く飄乎として來たり、青い葉がぐれに立ち迷ふ如く、その頬は、うすくれなゐに、そのうなじは、花よりも白い、名も知れぬ可憐の少女を、たゞちに、現實の人として感受することは、困難なほどであつた。

余は、白晝夢にはあらずやと、疑つた。余は、縁に立ち、手招いて、早く、草の中より出で給へ、と呼んだ。

知加は、袂をあげ、草を分けつゝ、余の傍らへ歩いてきた。

やがて知加の物語るところによつて、不思議は、すべて氷解し、尋常なる現實に戻つたのだが、それにしても、この數秒間の、不思議にも美しかつた印象を、余は、永き記念とし、而して、余の胸奥に、五十三歳にしてはじめて知る春の水を湧き立たしめる契機ともなつ

たのである。余は全く、少年の如く上氣し、狼狽したのであつた。

知加は、亡妻すぎの遠い従妹であり、余がすぎの實家をおとづれた頃、知加の方では、余の顔をおぼえてゐるのであつたが、余の方では、忘れたのである。その頃知加は、まだ、十二三の少女だつたから、余が、見ちがへる方が、あたり前であつた。すぎの實家は、S縣S市であり、知加もその市に住んでゐた。東京の高等女學校を卒業したのであるといふ。このたび、知人、金森二郎が應召となり、B聯隊へ入隊するのを送つて出京したが、ついでに、暫く在京して、茶、生花、音曲などを習練したいといふ目的を、ポツポツ、語つた。「それで、大へん、あつかましいんでございますけれど、叔父さまのお家へおいて頂けないでせうか」

と、知加は、稍々語氣を強めていつた。余は、このやうな美しい少女を、余が座右に眺めうるのは、至上の快樂と思はざるを得ないので、知加の申出には、さつそく、應諾を與へたかつたが、部屋の割當が、必ずしも余の一存ではいかなかった。

後刻、娘らに、これを謀つたところが、臺所の横の女中部屋二疊なら、提供して可ならんといふ。知加を、女中として遇してよきや否や、子供らの間にも、異見が續出したが、余はいづれにしても、知加を余の家庭の一員に加へうるは、至大の満足であつた。但し、この時、余の面上にうかぶ満足感を看て、娘らは、早くも余が胸中の祕密を洞察したかもしれない。

知加は、その日から、余の家の女中部屋に起き臥しすることとな

つた。余は先づ、率先して、その煤だらけの女中部屋を清掃した。疊もあげて、乾し、蚤取り粉をまき散らした。娘らは、この不時の闖入者に對して、最初から、わだかまりを持つ如く、女中部屋の清掃にも、協力的ではなかつた。バケツを出して來てはくれても、はい、といつて、たゞ、そこへ、出し放しにしていくといふ冷淡ぶりであり、知加は、先づその第一日からして、小さい胸を痛めずにはをれなかつたことだらうと、余は想像した。然し、余は、敢て、娘らに文句をいふ筋もないので、代りに、余自身、バケツの水をくみに、裏口の洗場へ走つた。

一兩日ののち、知加は、金森二郎の首途を送らんとて、出かけていつた。生憎と篠つく雨であつた。雨傘の持ち合せがないので、朝